

平成28年度
～防災の日常化をめざして～
みえの防災活動事例集

三重県防災対策部
防災企画・地域支援課

はじめに

東日本大震災からまもなく6年の歳月が経過します。また、4月には、震度7を2回記録した熊本県を中心とする大規模な地震災害により、多くの方が被災されました。さらに、10月には、鳥取県中部でも地震が発生し、これらの被災地では、今も復興に向けた懸命な努力が続けられています。

一方、本県において大きな被害をもたらした紀伊半島大水害から6年を迎えます。風水害は、平成28年年だけでも6月には九州を中心に、8月には東北・北海道を中心に甚大な被害をもたらすなど、年々その様相を変えながら厳しさを増しております。

あらゆる災害に備えるためには、自らの安全は自ら守る「自助」、自らの地域は皆で守る「共助」、行政及び防災関係機関が担う「公助」の理念に基づいて、県民の皆さん、自主防災組織、事業者、市町、県、防災関係機関がそれぞれの役割を果たしていく必要があります。

近い将来、南海トラフ地震による甚大な被害が想定されている三重県にとっては、災害への備えが非日常的な特別な活動ではなく、日々の生活と一体となった当たり前の活動となること、すなわち「防災の日常化」を意識しながら、備えを進めていく必要があります。日頃から災害に対する十分な備えを実践して、防災・減災に向けた活動が日々の生活と一体となった「防災の日常化」を実現させましょう。

この事例集は、「みえ地震対策の日シンポジウム」において表彰された、平成28年度「みえの防災大賞」受賞団体の、特色ある自主的な防災活動を皆さんにご紹介するために作成しました。これらの活動を参考に、県民の皆さんがお住まいの地域に合った防災活動に取り組み、災害に強い三重を一緒につくっていきましょう。

平成29年1月 三重県防災対策部

平成28年12月10日（土）に伊賀市あやま文化センターで開催した「みえ地震対策の日シンポジウム」で、平成28年度「みえの防災大賞」表彰式が行われました。



目 次

平成28年度みえの防災大賞受賞団体として県内各地で特色ある自主的な防災活動を行っている団体を募集し審査を行い、「みえの防災大賞」1団体と「みえの防災奨励賞」5団体を表彰しました。

みえの防災大賞

賀田自主防災会ひまわりの会	1
(尾鷲市)	

みえの防災奨励賞（五十音順）

社会福祉法人杏南会特別養護老人ホームたちばな園	2
(熊野市)	
中央ゆめづくり協議会防災防犯部会	3
(名張市)	
浜郷地区まちづくり協議会	4
(伊勢市)	
三重外湾漁業協同組合	5
(南伊勢町)	
度会郡大紀町立錦小学校	6
(大紀町)	



平成28年度みえの防災大賞

賀田自主防災会ひまわりの会

「賀田自主防災会ひまわりの会」は、構成会員の大半が高齢者等の要援護者である中、「自分たちの命は自分たちで守る、一人の犠牲者も出さない。」ことを基本理念に、平成24年2月から活動しています。

賀田奥地区は、賀田地区中心部から離れており、地域全体が津波浸水区域であるものの、周囲に適切な避難所等がなかったため、地域住民自らの手で高台へ避難所を整備しました。

また、日頃から住民同士の関係性を重視し、整備した避難場所をサロンがわりに、一日一回近隣住民で集まり話し合いをし、逃げ遅れないための体力づくりに向けたラジオ体操の実施や、避難所の維持管理にも努める等、参加しやすい組織づくりを構築しています。

避難所には、ソーラーパネル、簡易トイレ、炊き出し用のコンロを設置し、飲料水や備蓄食についてもすべて自らが確保し、大規模災害時に備えています。

さらに、世帯台帳、安否確認票を作成し、リヤカー等を利用した災害時要援護者避難訓練、安否確認訓練、炊き出し訓練等を実施しています。

このように、同会は地域防災の活性化に貢献しており、高齢化が進む他団体や他地域への見本となり、同様の取組の広がりが大いに期待されます。



地域住民自ら整備した避難所（ソーラーパネル、炊き出し用コンロ、簡易トイレ、飲料水の確保）



防災訓練（災害時要援護者への声かけ、災害時要援護者避難支援、炊き出し）の様子



奨励賞

平成28年度みえの防災奨励賞

社会福祉法人 杏南会

特別養護老人ホーム たちばな園

「社会福祉法人杏南会特別養護老人ホームたちばな園」は、東日本大震災など過去の大災害時における福祉避難所の設置・運営に関する課題を踏まえ、たちばな園での福祉避難所の設置・運営を円滑に行うことを目的に活動しています。

内閣府が示したガイドラインで設定された人員配置や必要面積等の基準を、交代要員や介護スペース等を勘案し、検証のうえ独自に改善し、三重県で初めて福祉避難所運営マニュアルを作成しました。

また、マニュアル作成のみにとどまらず、同マニュアルに基づき避難所運営訓練を繰り返し行うことで、新たな課題を発見し、すぐに改善を図るなど継続した取組を進めており、三重県内の福祉避難所運営マニュアルのスタンダードになることをめざしています。

これら取組が、他の福祉避難所の取組への広がることも期待されます。



キックオフ講演会



ワークショップにおけるマニュアルの検討

福祉避難所 運営マニュアル

特別養護老人ホーム
たちばな園



H27. 12

協力：熊野市・三重大学・三重県・中部電力
熊野市社会福祉協議会・熊野市身体障
がい者福祉連合会



作成した福祉避難所運営マニュアル



マニュアルに基づいた福祉避難所運営訓練の様子

平成28年度みえの防災奨励賞 **中央ゆめづくり協議会防災防犯部会**

「中央ゆめづくり協議会防災防犯部会」は、自分たちの街は自分たちで守ることを目的に地域住民全体が参加・協力して訓練やイベントを実施しています。

当地域は新しい住宅が多く、災害時には在宅避難が多いことが想定されるため、1週間分の備蓄とローリングストック法を推奨しており、自宅の備蓄品だけで何食分の料理を作ることができるか、何日過ごせるかを考えるためのゲーム「サバイバルクッキングゲーム」を考案し、実践的に取り組んでいます。さらに、備蓄食材で誰でも簡単に作れるアレンジレシピ「缶乾レシピ」を提案しています。

また、100円で揃えることができる防災グッズについて提案する等、住民視点の活動を行っています。

こうした防災が身近なものに感じられる取組は、地域の防災意識の向上につながっており、今後の活動の広がりも大いに期待されます。



「サバイバルクッキングゲーム」



男の料理教室とのコラボレーションと「缶乾レシピ」
(写真：さば味噌煮缶でなんちゃって冷汁)



地域のイベントでの啓発活動



子育て世代への「100円防災」の提案

平成28年度みえの防災奨励賞 **浜郷地区まちづくり協議会**

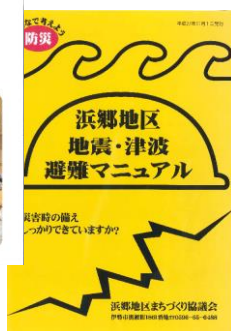
「浜郷地区まちづくり協議会」は、「みんなでつくろう 安心・安全のまち」をテーマに地域づくり・まちづくりを行っているなかで、「自分たちで助け合い 災害から身を守る」として防災を重点目標に平成24年から取り組んでいます。

防災活動として、平成25年度に防災3ヶ年計画を定め、①命を最優先にした緊急避難体制の確立、②守った命を危険にさらさない避難所運営体制の確立。③一日でも早い復興に向けた避難所運営を活動目標としており、計画的に取り組んでいます。

平成28年度から新防災3ヶ年計画を定め、①地区防災組織づくり、②地区で使用する避難所の確立、③防災資機材の拡充及び非常用物資の備蓄、④要配慮者への対応を活動目標に取り組むこととしています。

また、小学生向けの避難所運営ゲーム（HUG）「浜郷ハグハグ」を作成し、小学生の防災力向上のための取組も行っています。

これらの計画的な取組や、小学生も巻き込んだ取組は、地域の防災意識の向上に加え、次世代の防災人材の育成にも貢献しており、他団体や他地域への広がりも期待されることです。



基本計画や各種マニュアルを策定

小学生向けの避難所運営ゲーム「浜郷ハグハグ」



安否確認



運営本部



炊き出し訓練

平成27年度浜郷地区総合避難誘導訓練



平成28年度みえの防災奨励賞

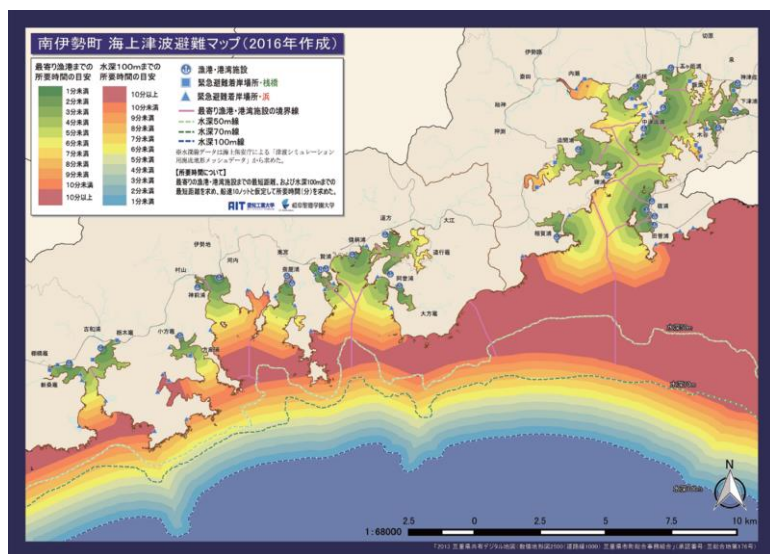
三重外湾漁業協同組合

「三重外湾漁業協同組合」は、漁業者にも避難の指針となる対策が必要として、海から目線の防災対策と銘打って平成24年8月から取組を行っています。

海上の漁船への情報伝達手段の検証を行うとともに、操業場所からの津波避難について沖合避難か陸上避難かを意思決定するため、最寄りの港や水深100mまでの所要時間、緊急避難着岸場所も記載した「海上津波避難マップ」を作成し、全漁業者に配布するなど、漁業者の意識向上を図っています。

また、奈屋浦漁港の業務継続計画（BCP）を作成したり、南伊勢高校と連携し、いつも持ち歩く鞆に入れて携帯できる「Myゼロパック」を考案・開発し、普及啓発に取り組んでいます。

これらの取組については、全国的にも先進的なものであり、すでに様々な機会を取組が紹介され、地域の防災意識の向上にも貢献しており、他漁港への広がりも期待されるところです。



南伊勢町内全海域における海上避難マップ



避難マップの説明会と避難検証訓練の様子



奈屋浦漁港水産業事業継続計画（BCP）の作成と机上訓練



「Myゼロパック」



平成28年度みえの防災奨励賞

度会郡大紀町立錦小学校

「度会郡大紀町立錦小学校」は、総合的な学習の時間を防災学習にあて、年7回の避難訓練を授業中や休み時間、下校中など様々な時間帯で実施するとともに、東日本大震災の教訓から、子どもたち自身が津波想定にとらわれず、より高いところがある高台への避難を意識した避難行動をとるようになっていきます。

今年、実際に緊急地震速報が放送された際には、全児童・全職員が5分以内の高台避難を実現しています。

また、避難所までの時間がわかる避難経路紹介ビデオの作成に加え、錦内のどこにいても近い避難所や所要時間がわかる防災マップを作成し、地域住民だけでなく被災地の子どもたちやエクアドル防災視察団に紹介する等、その取組は学校内に留まらず、地域内外の防災意識の向上や安全安心にもつながっており、他の学校の模範となるものです。



避難経路紹介ビデオ



宮城の子ども達の大紀町民泊交流ツアー



年7回の様々な場面からの避難訓練の様子



2016 ZENRIN 地図より

どこにいても近い避難所や所要時間がわかるマップ作り